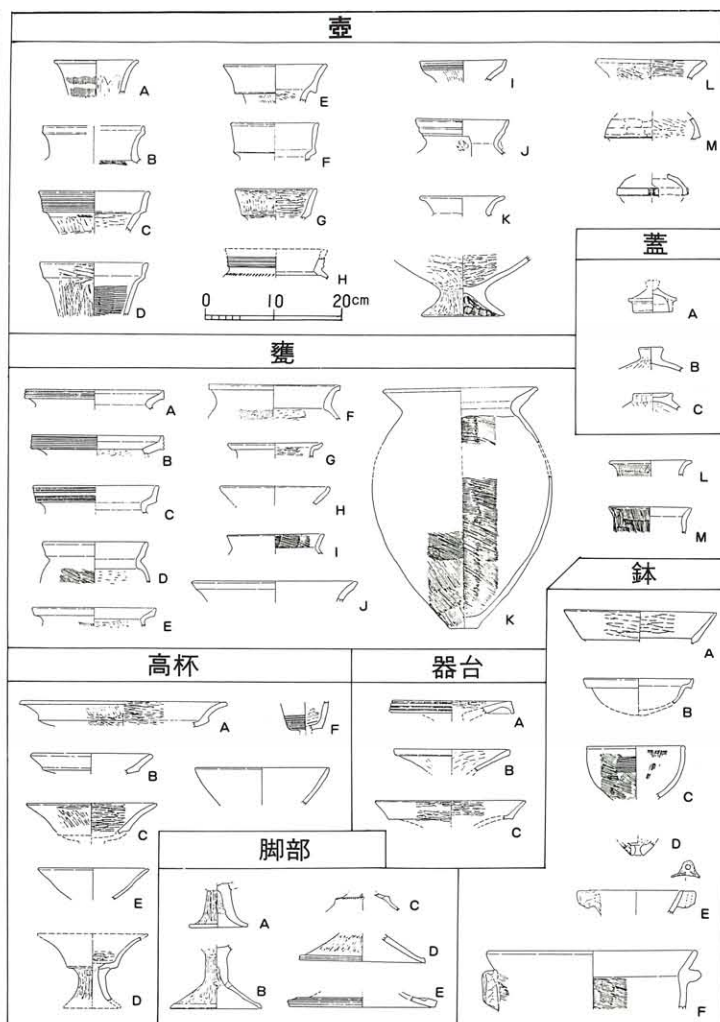
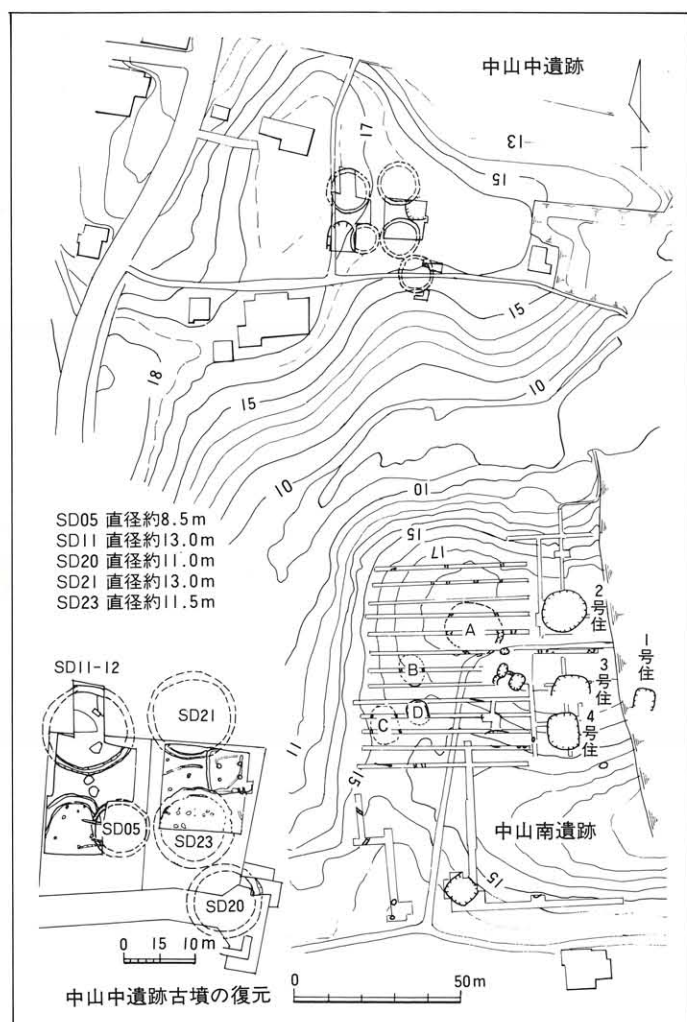


小杉町中山中遺跡発掘調査概要



1991年3月

富山県小杉町教育委員会

序

文化財は先人の生活を今に伝えてくれる文化遺産です。これまでの調査で小杉町南部の射水丘陵では、さまざまな内容の遺跡が集中している地域として知られています。

このたび、宅地造成のため調査をしました中山中遺跡からは、弥生時代末から古墳時代の集落跡や古墳が発見されました。同時代の代表的な集落跡として著名な中山南遺跡とは谷一つ隔てた同じ丘陵中に存在し、当時のムラのように復元する手掛りを与えてくれました。

本書は調査の概要をまとめたものですが、多くの人に活用され少しでも地域の文化の理解に役立てば幸いです。

なお、調査に際しご協力いただいた地元や関係各位に対し、深く感謝いたします。

平成3年3月

小杉町教育委員会

教育長 川 腰 豊 一

例 言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町太閤山1丁目に所在する中山中遺跡の発掘調査概要書である。
2. 発掘調査は、個人の宅地造成に先立ち小杉町教育委員会が調査主体となって行なった。調査の実施にあたっては、平成元年・2年の県費補助金の交付を受けた。
3. 平成元年度は、試掘調査を富山県埋蔵文化財センター主任久々忠義が担当し9月12日に行なった。本調査は小杉町教育委員会納谷守幸が担当し、10月26日から11月13日までの間に延べ11日間実施した。
平成2年度は、本調査を小杉町教育委員会上野章・原田義範が担当し、4月11日から5月2日までの間に延べ13日間実施した。
4. 調査事務局は、小杉町教育委員会に置き、事務は主任金山秀彰が担当し、社会教育課長竹林真昭(平成元年)、荒川秀次(平成2年)が総括した。
5. 遺物の整理は、各調査担当者が行い、また、本書の作成はⅢ-1-1(1)を納谷が行ない、他を上野・原田があたった。
6. 遺構番号の頭の分類記号は次のとおりである。
SB：住居跡、SD：溝、SK：穴、P：柱穴・柱穴状小ピット

目 次

I. 遺跡と周辺の遺跡	1	第6図 SB01出土遺物	7
第1図 地形と周辺の遺跡	1	第7図 SB01出土遺物	8
II. 調査の経過	2	第8図 SB01、SD11、SK16・17・18出土遺物	9
1. 遺跡の概要	2	第9図 P ₃ 、調査区内出土遺物	10
2. 昭和56年の調査(1次発掘調査)	2	2. 平成2年の調査	11
3. 平成元年の調査(2次発掘調査)	2	(1) 遺構	11
4. 平成2年の調査(3次発掘調査)	2	(2) 出土遺物	12
第2図 発掘区位置図	2	第10図 SD21・22・23、SB25遺構図	13
III. 調査の概要	3	第11図 SB25遺構図及び土層図	14
1. 平成元年の調査	3	第12図 SD21・22・23、SB25出土遺物	15
(1) 遺構	3	第13図 調査区内出土遺物	16
第3図 調査遺構図	3	IV. まとめ	17
(2) 出土遺物	4	1. 遺構	表紙左 中山中遺跡と中山南遺跡の遺構
第4図 SB01、SK13・16・18・19遺構図及び土層図	5	2. 出土遺物	右 中山中遺跡出土土器の種類
第5図 SD11・12、SK13・16・17・19遺構図及び土層図	6	参考文献	
		図版	

I . 遺跡と周辺の遺跡

中山中遺跡は、射水郡小杉町太閤山1丁目に所在する。遺跡の存在する小杉町は、富山県の西部に位置し、東西方向に約5km、南北方向に約12kmの細長くのびた行政区画である。町の南側半分は、富山市から大門町にかけて広がる射水丘陵によって占められている。

この丘陵の南側は、少しずつ高くなって、標高117mの高津峰山を主峰とする山地に連なり、更に南の山地へと続いている。丘陵の地質は、新世代第3紀の泥岩・砂岩層によって構成され、下条川・和田川などその小支流が樹枝状に入りくみ起伏に富んだ小丘陵を作り出している。丘陵北側の粘土は良質で、現代の瓦の原料として利用されている。

中山中遺跡は、射水丘陵と沖積平野の接する丘陵先端寄りに立地し、標高は10~17mを測る。この丘陵に接する沖積平地の標高は5~6mで、遺跡付近での比高は5~10mある。

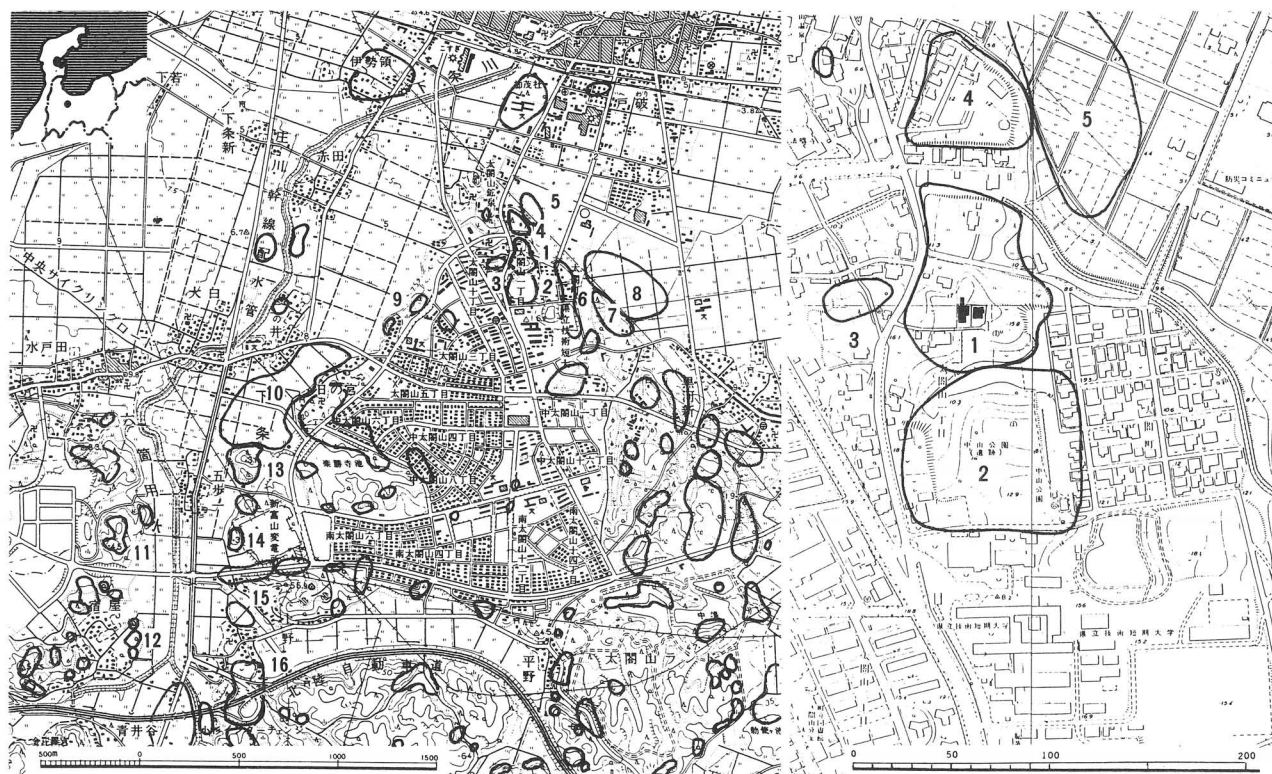
当遺跡の周辺には、丘陵上及びその縁辺に多く遺跡が分布し歴史的環境に恵まれている。

縄文時代では、縄文前期のクルミ・クリ、獣骨・魚骨などの食料残滓が多く見つかった南太閤山I遺跡や、縄文中期の石組炉が発掘された上野遺跡がある。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、下条川流域周辺で遺跡数の増加がみられる。集落では、弥生後期から古墳初頭の上野遺跡、中山中遺跡の付近では、中山南遺跡・三谷遺跡などがある。また、墳墓では、南太閤山I遺跡と囲山遺跡で方形周溝墓や台状墓が調査されている。

古墳時代では、弥生時代から古墳時代初頭の遺跡と重複または、近接して古墳が築かれている。下条川流域の首長墓として前方後方墳の五歩一古墳や谷向かいに対峙する変電所西古墳がある。5世紀後半から6世紀にかけての群集墳は、山王宮古墳が知られている。

奈良から平安時代にかけては、須恵器・鉄・木炭の生産遺跡が射水丘陵に数多く残されている。



第1図 位置と周辺遺跡

- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|------------|-------------|
| 1. 中山中遺跡 | 2. 中山南遺跡 | 3. 石坂遺跡 | 4. 中山北遺跡 | 5. 中山北B遺跡 |
| 6. 二ッ山古墳 | 7. 一ッ山古墳 | 8. 三谷遺跡 | 9. 囲山遺跡 | 10. 日の宮遺跡 |
| 11. 五分一古墳 | 12. 宿屋古墳 | 13. 山王宮古墳 | 14. 変電所西古墳 | 15. 南太閤山I遺跡 |
| 16. 上野遺跡 | | | | |

II. 調査に至るまで

1. 遺跡の概要

中山中遺跡の発見は古く昭和34年発行の「小杉町史」では、石坂遺跡と呼ばれ縄文前期から晩期におよぶ遺跡として報告されている〔木倉1959〕。また、昭和37年発行の「富山県の石器と土器」の縄文遺跡地名表には、射水郡の主な遺跡として串田新遺跡と中山遺跡が紹介されている〔早川1962〕。中山中遺跡として呼ばれたのは、昭和40年発行の文化財保護委員会「全国遺跡地図(富山県)」からである。しかし、遺跡の北側をかつて瑞穂農場と呼んだことから昭和47年発行の「富山県史・考古編」には、瑞穂農場遺跡出土の古式土師器として図が掲載されている。

最近では、5～6世紀前半の県内の須恵器出土地地名表に中山中遺跡からTK216、TK23型式の須恵器の出土が示されている〔西井1988〕。

このようにこの遺跡からは、旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代までの各時期の遺物がこれまでに出土し、射水丘陵の主要な遺跡として取り扱われている。

2. 昭和56年の調査(第1次調査)

昭和56年太閤山住宅団地造成事業の一環として富山県土木部建築住宅課による道路拡幅工事が計画され、これに先立ち小杉町教育委員会が4月27日から5月2日までに2日間の試掘調査を実施した。調査は、東西約80m、幅員6mの計画路線の北側部分を対象とし、約56㎡の発掘を行なったところ弥生時代末から古墳時代初期の住居跡2棟とピット群が検出された。

この調査結果にもとづく協議で、道路工事は中止され既設の道路のままの状態とされた。

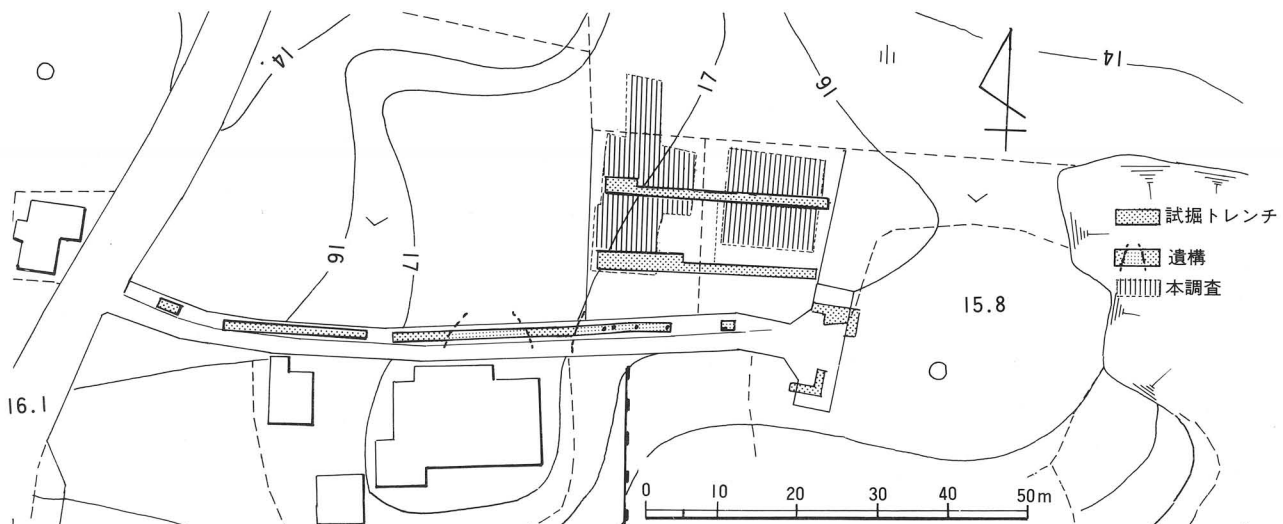
3. 平成元年の調査(第2次調査)

1期調査 宅地造成に伴う試掘調査で、埋蔵文化財センターの協力を得て、9月12日に実施した。対象面積は約330㎡で、発掘面積が約67㎡であった。遺構は古墳の周溝・穴が検出された。

2期調査 宅地造成に伴う本調査で、宅地部分と古墳の規模を確認するために北側の県有地の拡張部を合わせた約210㎡を発掘した(A地点)。また、建築認可にあたっての条件とされた転回道部分約20㎡の調査も行なった(B地点)。調査期間は、10月26日から11月13日までであった。

4. 平成2年の調査(第3次調査)

宅地造成に伴う本調査で、4月11日から5月2日までの期間に約149㎡の発掘を行なった。



第2図 発掘区位置図

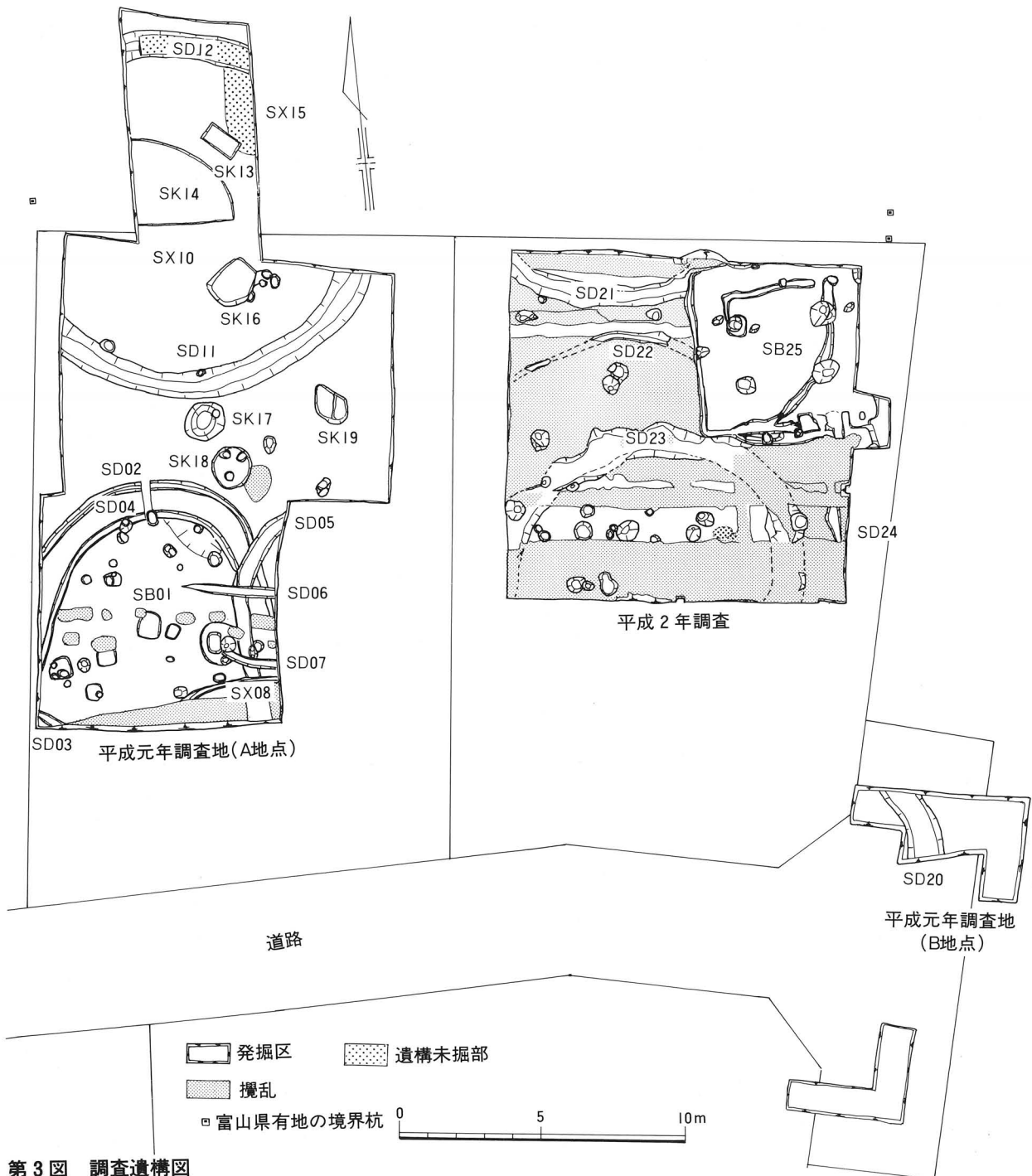
III. 調査の概要

1. 平成元年の調査

(1) 遺構 (第3～5図)

調査で確認した遺構は、竪穴式住居跡1、穴5、溝8、竪穴式住居跡の可能性のあるもの2箇所を検出した。この内、弥生時代末から古墳時代初期の遺構は、SB01、SD02・03、SK16～19であり、古墳時代の円墳の周溝と思われるものは、SD05・11・12・20である。

この他、B地点の南斜面では縄文土器がまとめて出土し、付近に遺構の存在が予想された。



第3図 調査遺構図

SB01 調査区南にある不整形の竪穴式住居跡。現状で地山を30cm程掘り込んでいる。外周の溝SD02・03により、直径10mの規模を想定できる。主柱穴はP₁～P₇と考えられる。

SD02 SD01の外周の溝の北側部分にある。幅20～35cm、深さ5～12cmを測る。

SD03 SB01の外周の溝の南西部分にある。幅40cm、深さ15cmを測る。

SD04 SB01の内周を区画する周溝状の小溝。SD02の約80cm南側に位置し、幅30cm、深さ15cmを測る。SD02とSD04の間は、5cm程高くなる。

SD05 SB01より新しい東西溝である。幅60cm、深さ5～10cmを測り、古墳の周溝であろうか。

SD06 SD05より新しい東西溝である。幅40cm、深さ15cmを測る。

SD07 SD05より新しい東西溝である。幅35cm、深さ10cmを測る。

SX08 調査区南端で検出した溝である。SD05より新しいがSB01との前後関係は不明で、竪穴式住居跡の一部であろうか。

SX10 直径13mの円形の墓で、墳丘は削平されほとんど残っていない。周溝SD11・12により周囲と区画される。主体部は穴SX14により壊されており、実体は不明である。

SD11 周溝の南側で、幅1m、深さ50cmを測る断面逆台形状の溝である。

SD12 周溝の北側部分で、幅1m、深さ50cmを測る断面逆台形状の溝であり、一部を完掘した。

SK13 SD12の南2mに位置する長方形の穴で、長辺1.4m、短辺0.8m、深さ20cmを測り、北で西に45°ふれる。SX10に伴うかは不明である。

SK14 SX10のほぼ中央にある攪乱層。主体部の盗掘層か。

SK15 調査区北に位置し、SX10、SK13より古い穴で竪穴式住居跡の一部であろうか。未掘。

SK16 SD11の北1mに位置する不整形な穴で、長辺1.6m、短辺1.4m、深さ20cmを測る。

SK17 SD11の南に接する円形の穴で、直径1.4m、深さ35cm程を測る。

SK18 SD11の南2mに位置する円形の穴で、直径1.5m、深さ10cm程を測る。

SK19 SD11の南1mに位置する不整形な穴で、一辺1.1m、深さ10～25cmを測る。

SD20 調査区東端（B地点）の溝で、幅1.5m、深さ20cmを測る。古墳の周溝の一部であろうか。（納谷）

(2) 出土遺物

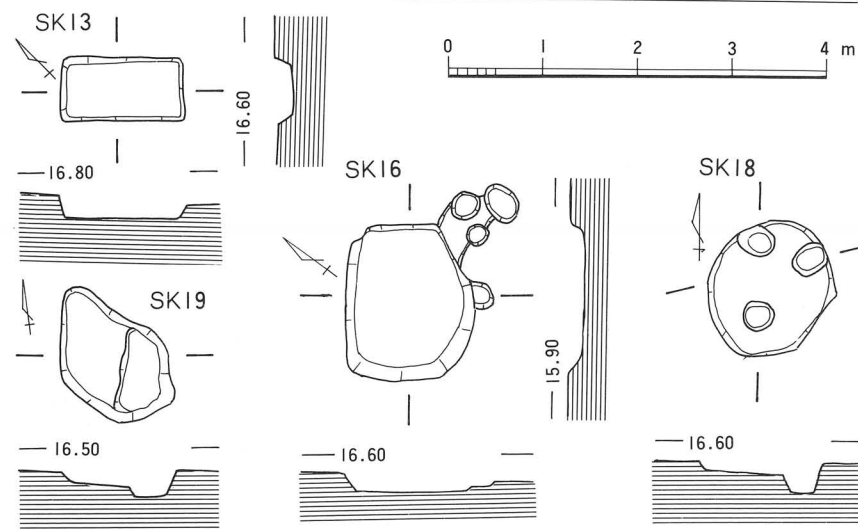
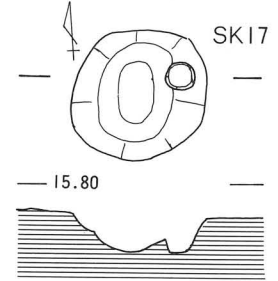
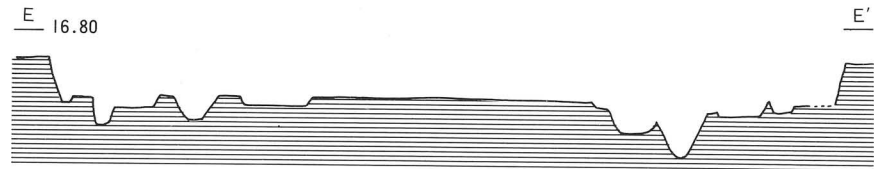
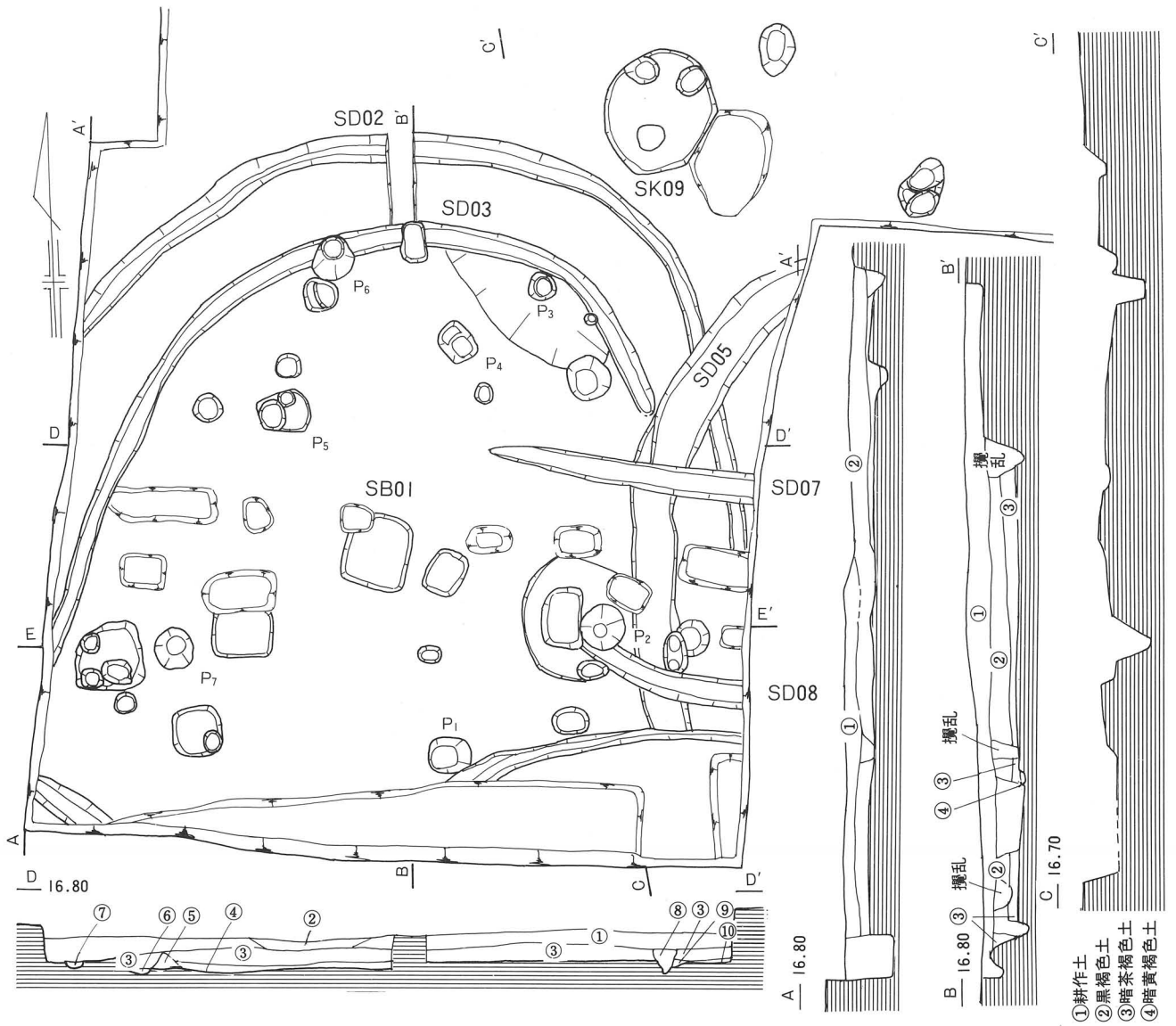
調査で出土した遺物は、主に弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器が多くと、縄文時代晩期の土器・石器や古墳時代、奈良・平安時代の土器が少く、いずれも細片化している。

SB01（第6・7・8図の1～139）

覆土に含まれた須恵器には、1～11がある。1は7世紀はじめの杯身、2・3は8世紀の杯蓋、4・6・7・9は9世紀前半の杯蓋、8～10は杯身で、11の摩滅した内面に赤彩の痕が残る。12は8世紀の土師器の甕。13は所属時期が不明の砥石で二面がよく使用されている。

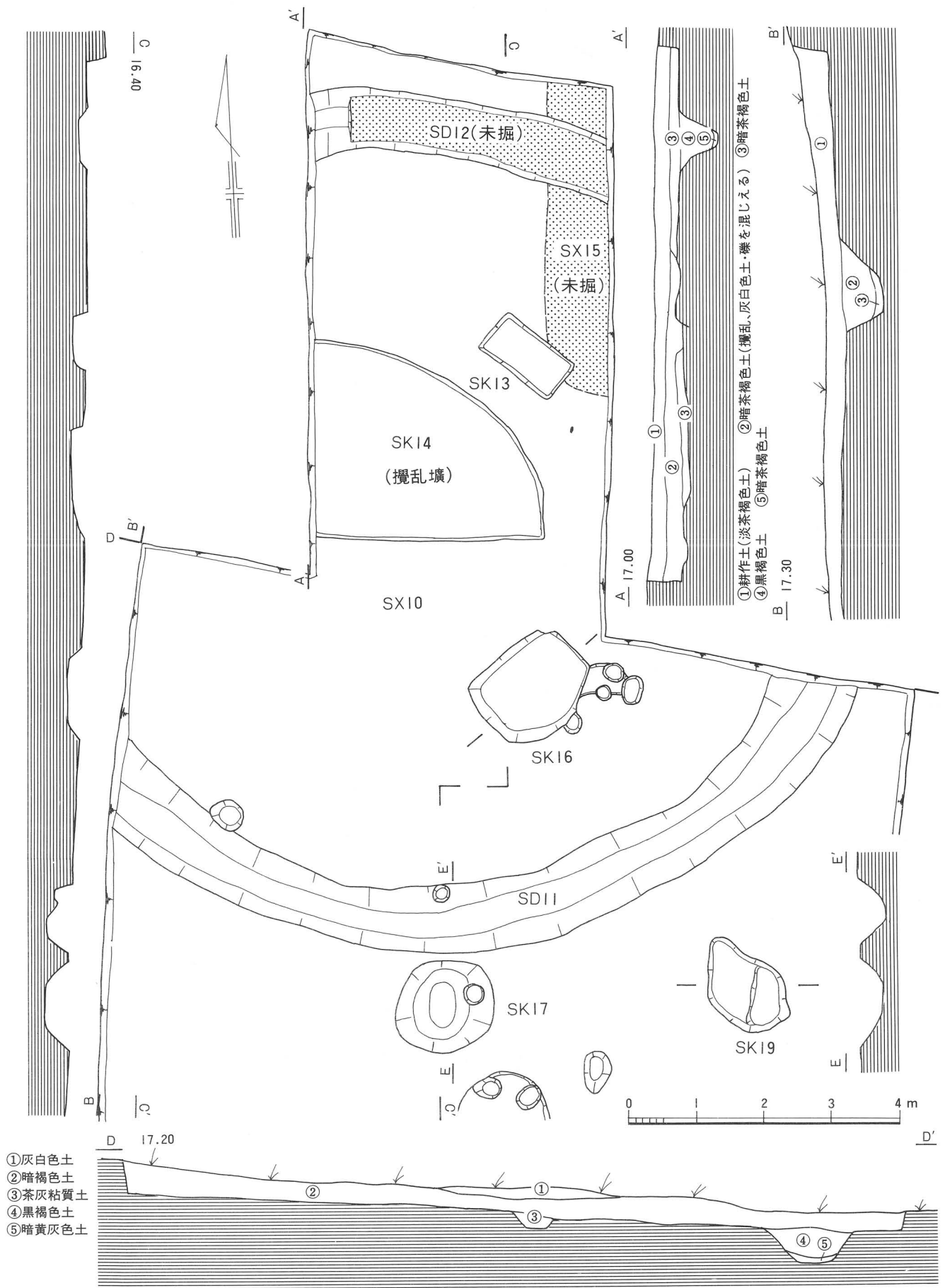
弥生時代末から古墳時代初頭の土器には、壺（14～27、29～38）、鉢（41・61・62）、蓋（42～48）、甕（63～116）、高杯（117～121、123～130、132～139）、器台（122・131）がある。以下、器種の分類は便宜的に行なったものであるが、それにしたがって説明する（表紙の右図）。

14は壺A、15・30は壺B、16は壺C、21は壺E、23は壺Aにそれぞれ分類できる。ヘラミガキ・疑凹線文を施した長頸の壺である。17～20・24・29～32、35～37は有段口縁をもつ壺Gである。34の壺Jの頸部には瘤状の小突起がつく。25～27の壺Mは赤彩した台付きの長頸壺で、蓋Aと組合わせて用いる。49～55は壺の底部で外部をヘラミガキやヘラケズリを行い、内部をハケメやヘラケズリ・ナデ調整をする。41は有段口縁をもつ鉢Bで、61は無頸の鉢Cで、



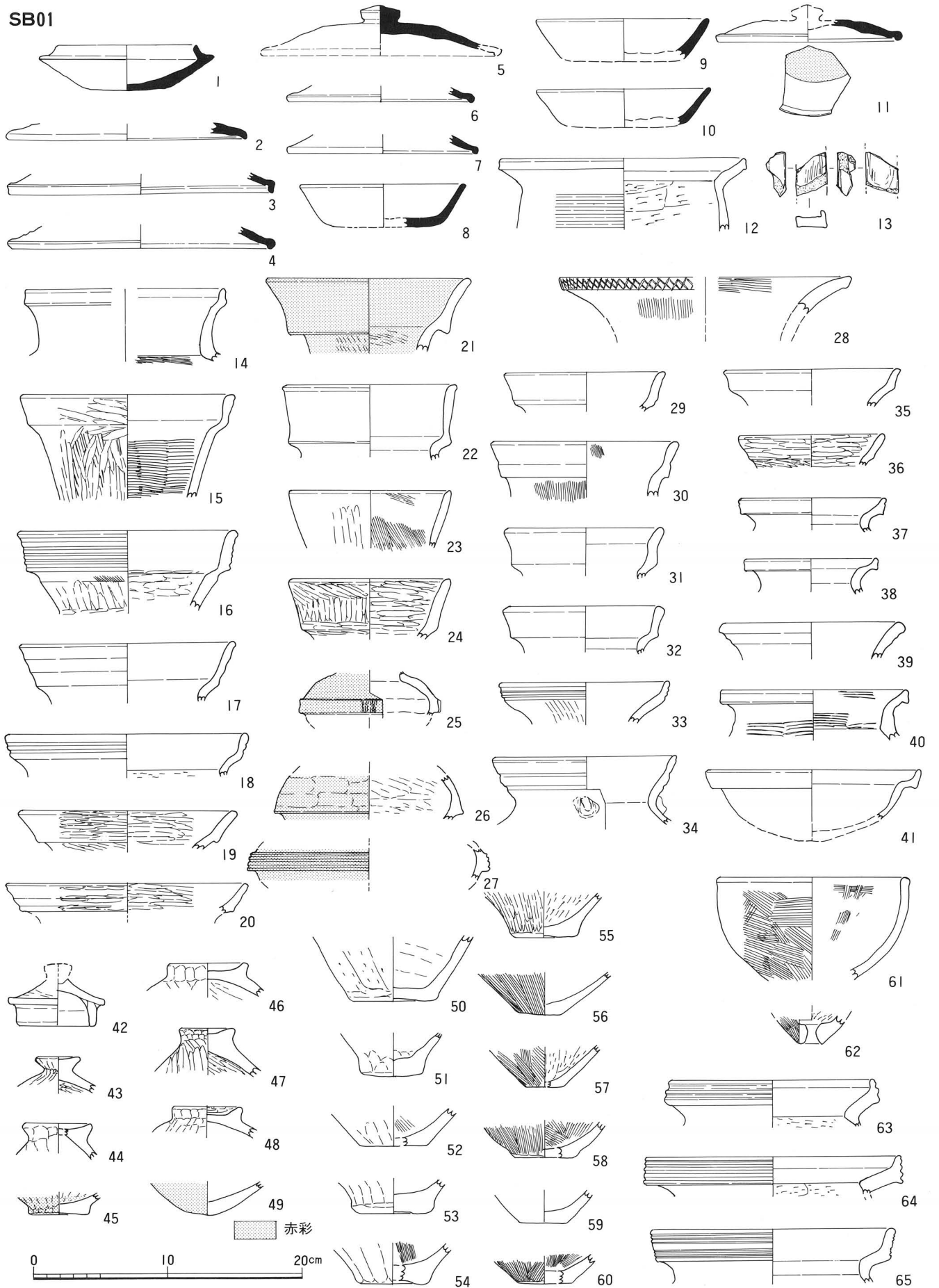
- Dセクション
- ①暗褐色土(遺物を多く含む)
 - ②黒褐色土(木の根跡)
 - ③黒褐色土(遺物を多く含む)
 - ④黒色土
 - ⑤暗茶褐色土
 - ⑥淡茶褐色土
 - ⑦暗茶褐色土
 - ⑧黒褐色土
 - ⑨暗黄褐色土
 - ⑩暗黄灰色土(地山)

第4図 SB01・SK13・16・18・19 遺構図及び土層図



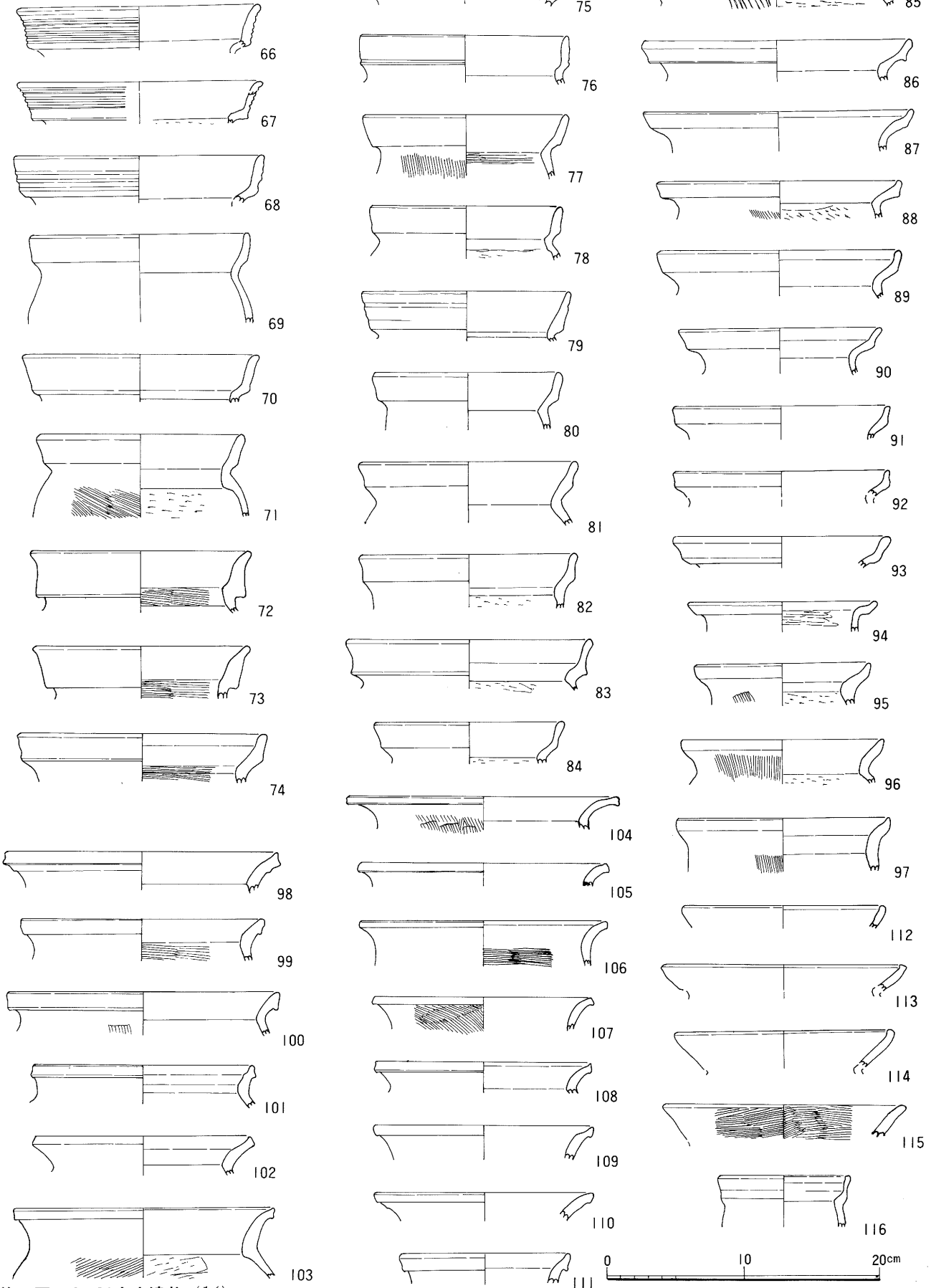
第5図 SD11・12、SKI13・16・17・19遺構図及び土層図

SB01



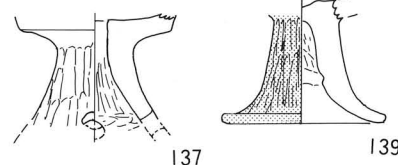
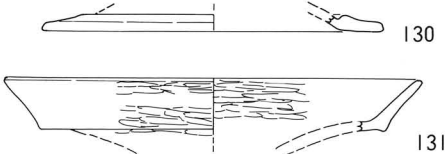
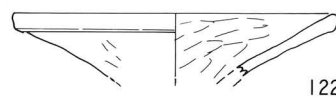
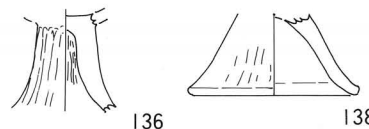
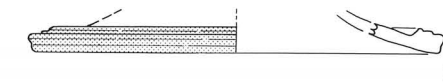
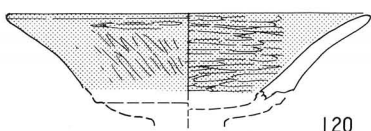
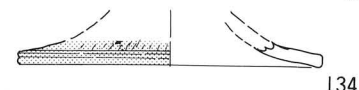
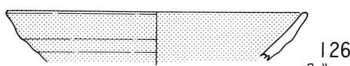
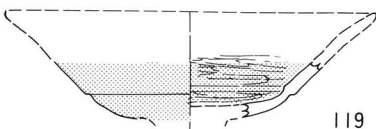
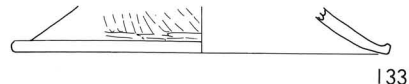
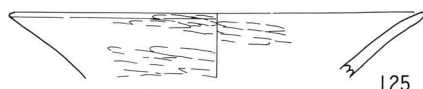
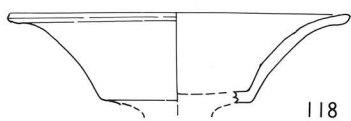
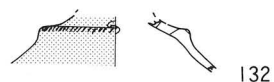
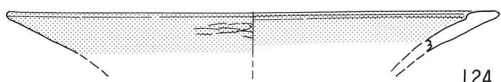
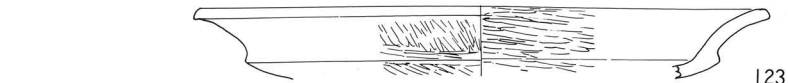
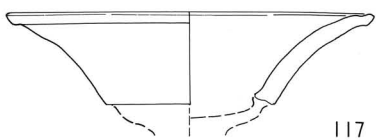
第6图 SB01出土遺物 (1/4)

SB01

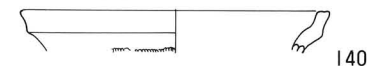


第7图 SB01出土遺物 (1/4)

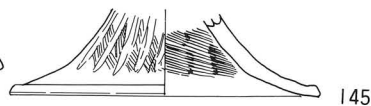
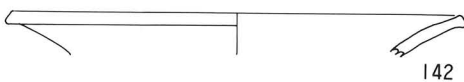
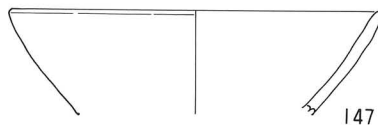
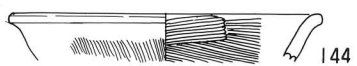
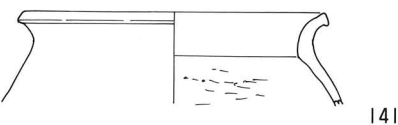
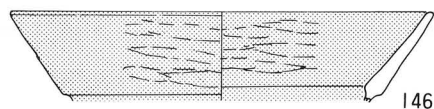
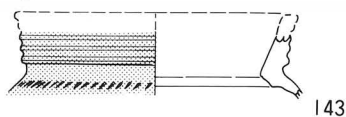
SB01



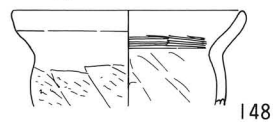
SK16



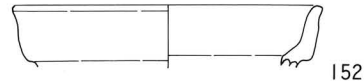
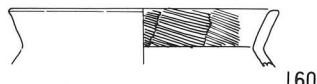
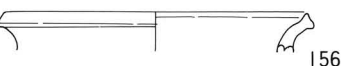
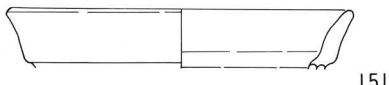
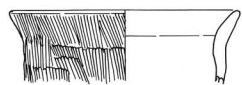
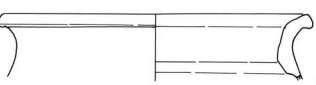
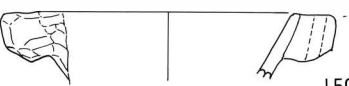
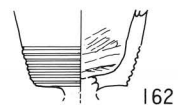
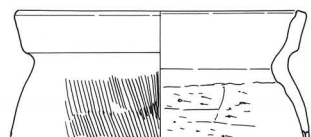
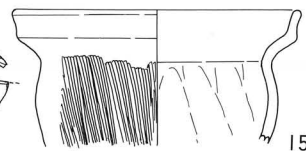
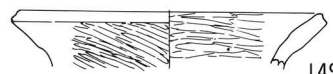
SK17



SK18



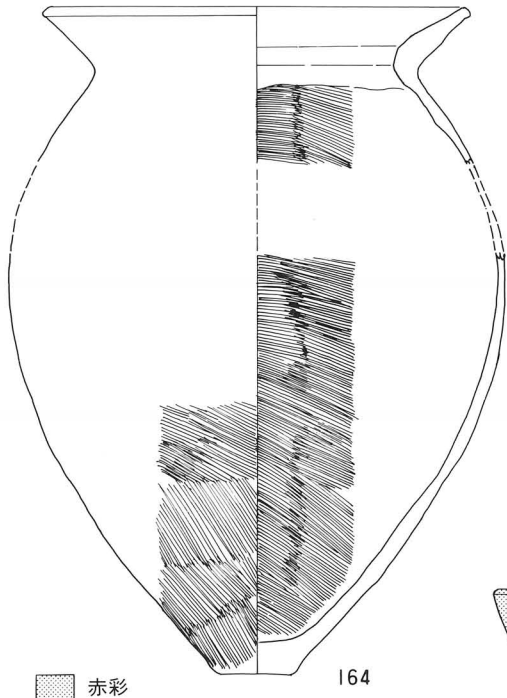
SD11



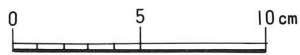
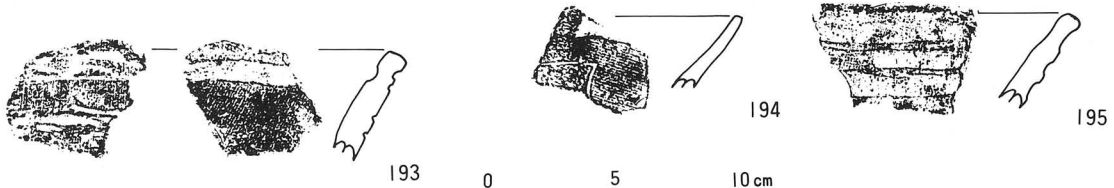
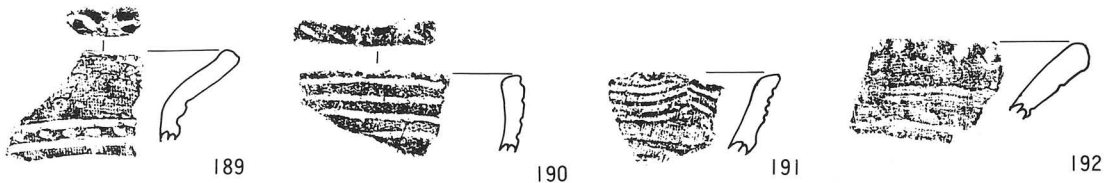
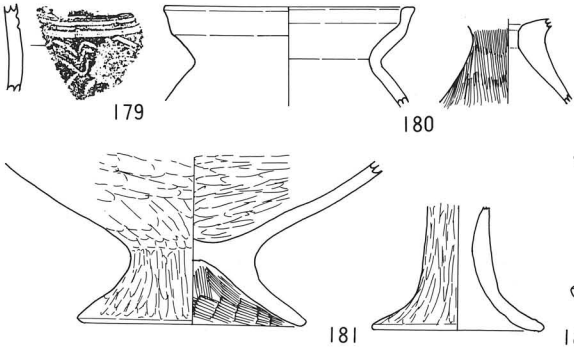
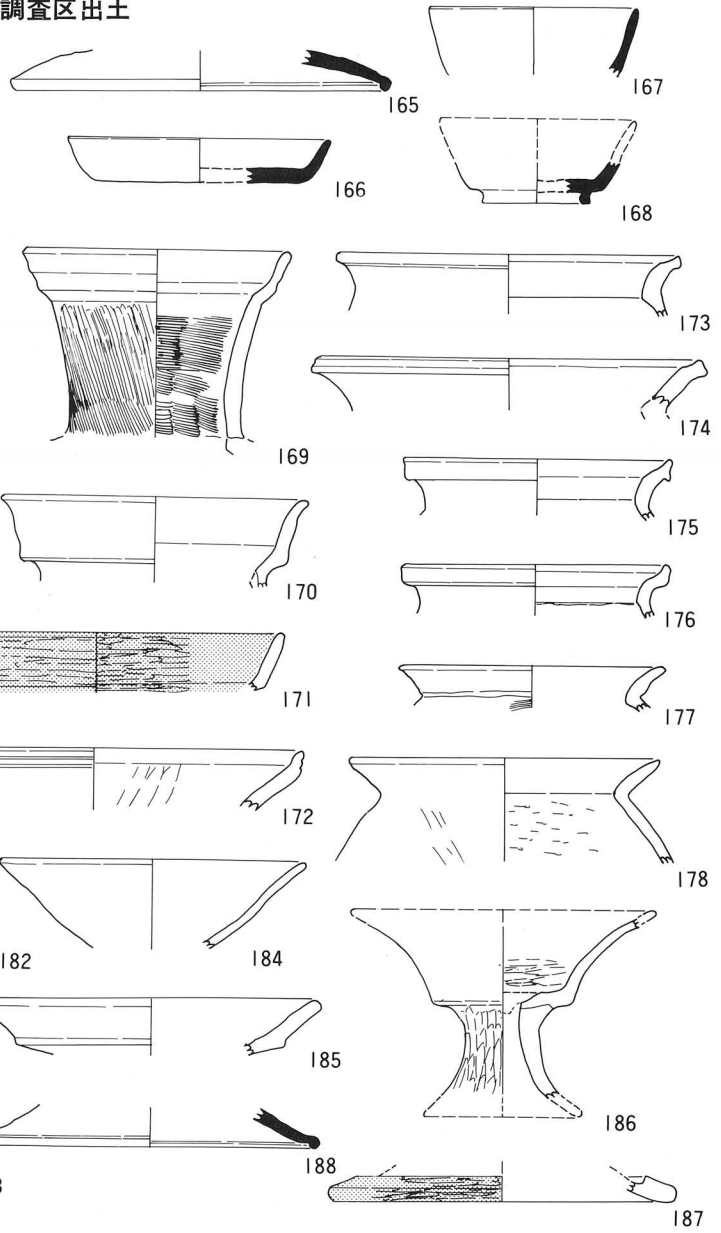
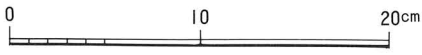
第8図 SB01・SD11・SK16・17・18出土遺物 (1/4)

- P₃

調査区出土



赤彩



第9図 P₃, 調査区内出土遺物 (164~187は $\frac{1}{4}$ 、189~199は $\frac{1}{3}$)

底部には有孔の62がつく。

63は甕A、64は甕B、65～68は甕Cにそれぞれ分類できる。有段口縁に擬凹線文をもつ甕で擬凹線文をもたない69～84の甕Dに比べわずかな出土量である。85～89の甕Eは幅の狭い有段口縁をもつもので、口縁部はヨコナデ調整をする。また「く」の字状の口縁をもつ甕はF～Mは、口縁部の変化の種類が多くみられる。98～103・108～111の甕Fは「く」の字状の口縁の中でも主体をしめる。94は近江系の影響を受けた甕Gである。95～97・112～113は、口縁端部がわずかに内湾ぎみになるものである。104～107は口縁部が外反し端部を面とりする。これらの甕の外面には煤状炭火物が付着したものが多くみられる。

高杯は、杯部の形態によりA～Fに分類した。123は高杯A、121は高杯Bにあたり、脚部C・Eと組み合わせり弥生時代後期に属する。117～120、124～126高杯Cにあたり、ヘラミガキ後に赤彩するものが多い。脚部にはA・B・Dがつき、外面をヘラミガキし、内面の筒部に絞りめを残し、端部にヨコナデ調整をする。

SK16 (第8図の140～142)

140は甕G、141は甕F、142は高杯Cに分類できる。

SK17 (第8図の143～147)

143は壺Hで、体部上半に刺突文をつける。144は鉢または甕Lである。146は赤彩の鉢A、147は高杯E、145は高杯脚部Bに分類できる。

SK18 (第8図の148)

148は小形の甕Hで、体部外面をヘラケズリ調整し内面にナデを行なう。

SD11 (第8図の149～161)

149は内外面をヘラミガキした壺Lで、150は貫通孔のある把手をつけた鉢Eである。151～154、158は有段口縁をもつ甕Dに、153は甕Eにあたる。155・156は「く」の字状の口縁をもつ甕E、157は甕H、159は甕M、160は小形の甕M、161は甕Kにそれぞれ分類される。162は小形の高杯Fで、外面にヘラガキ沈線を施した後にヘラミガキ調整をする。163は外面をヘラミガキした蓋Bである。

P₃ (第9図の164)

164は、ほぼ全形を復元できる卵形の体部をもつ「く」の字状の口縁をつけた甕Kである。土器の色調は淡褐色をなし、内外面にハケメ調整痕を残す。

調査区出土の遺物 (第9図165～199)

調査区の表土層や包含層から出土した遺物である。165～168、188は奈良から平安時代にかけての須恵器の杯身・杯蓋である。

169は壺D、172は壺I、170・171・180甕Dであり、173～176は「く」の字状口縁の甕Fで、177・178は甕Kである。179は壺の体部上半に三本組みの櫛状具による平行沈線文・波状文を施す。また、184は高杯E、185は高杯B、186は高杯Dに分類され、183は、脚部Aにあたる。

縄文時代の遺物は、調査区全般から出土した。石器には、打製石斧4、磨製石斧6(小形2)、石刀片1、擦り石1、凹石1、石鏃1、砥石片や剥片などがみられる。

土器は、晩期に属する精製土器と粗製土器がある。精製土器には189・191・194の深鉢や、198・199の浅鉢があり、粗製土器には、192・193・195の深鉢や、体部に条痕文を施したものが多くみられる。

2. 平成2年の調査

(2) 遺構 (第3・10・11、PL7～12)

調査対象地は、耕作による遺構面への攪乱が著しく、地山の黄褐色土に深く掘り込まれた遺構や局部的に攪乱をま

ぬがれた部分で遺構を確認した。遺構は、竪穴式住居跡1、溝4、柱穴状のピットを検出した。遺構の所属時期は、弥生時代末から古墳時代初期がSD21・26、P₂₁～P₃₀の柱穴状のピットであり、また、古墳の周溝と思われる溝が、SD21・SD23である。奈良時代の遺構は竪穴住居跡のSB25の1棟であった。

なお、以前に遺跡から旧石器時代の石器が採集されている。このため調査区の3箇所(A-A'セクションの北端・南端、P₂₆近く)を深掘りしたが、旧石器時代の石器は出土しなかった。土層はB-B'セクションに示したように粘質土と砂質土が相互に堆積していた。

SD21 調査区の北西端にある。SB25より古い溝で、幅70～90cm、深さ30～40cmを測り、黒色土の覆土をもち、古墳の周溝であろう。

SD22 調査区の北西にある。長さは、一部途切れるが5.2m程、幅15～40cm、深さ10～28cmを測り、竪穴住居跡の周壁溝の可能性がかんがえられる。覆土は、地山土に茶褐色を混じえたもので、同様の覆土をもつP₂₇・P₃₀・P₂₆・P₂₅がSD21の内側1m余りにあり、ピット底面のレベルや穴の大きさが似かよる。

SD23 調査区の南西にある。SB25より古い溝で、幅1.0～1.2m、深さ約20cmを測り、黒色土の覆土をした古墳の周溝であろう。

SB25 調査区の南東にある竪穴式住居跡。覆土は、上層より黒褐色土、茶褐色土、明茶褐色土の順に堆積する。平面形態が方形をなし、西壁の方向はほぼ真北である。壁の立ち上がりは西壁で垂直に近く、掘り方が約40cmある。床面はほぼ平坦で、西側では直径4～7cm、長さ25～60cmの炭化材数本が床面上にあった。

周溝は幅20～30cm、深さ10cm程で、西壁から南壁にかけて掘られ、さらに東側の主柱に連なる。主柱はP₁～P₄の4本で、床面から40～60cmの深さに掘り込まれる。他の穴は深さが、20～30cmと浅い。覆土中からは、須恵器・土師器・鉄滓が床面より10～30cm程浮き上がり出土した。しかしカマド袖部や周辺からは、234・236～238の土師器がまとまって出土し、また、218～220が床面直上から、217が壁面寄りから検出された。これらの遺物が住居跡に伴う遺物であろう。

カマドは南東壁に配され、袖は地山面を掘り残してつくる。焚口は床面まで掘り込む。燃焼部は、幅50cm、長さ70cmでまわりが赤褐色に硬く焼ける。煙出し先端は攪乱によって失っている。

SD26 調査区の南東にある。残存する溝の長さ1.3mで、幅25～50cm、深さ約10cm程を測る。

出土遺物

調査区内から出土した遺物は、弥生時代末から古墳時代初期の土器と、奈良・平安時代の土器が主体をしめ、少量の縄文時代の土器が各所から出ている。

SD21 (第12図の200～205)

200は蓋Bの摘みで、201～202は有段口縁をもつ壺Gであり、いずれも外面をヘラミガキして器面に赤彩する。205は壺Kで、203～204は甕Dで口縁部をヨコナデ調整している。

SD23 (第12図の206・207)

206は裾部が大きく開き、4孔をあけた高杯脚部で、207は小形の甕Mである。

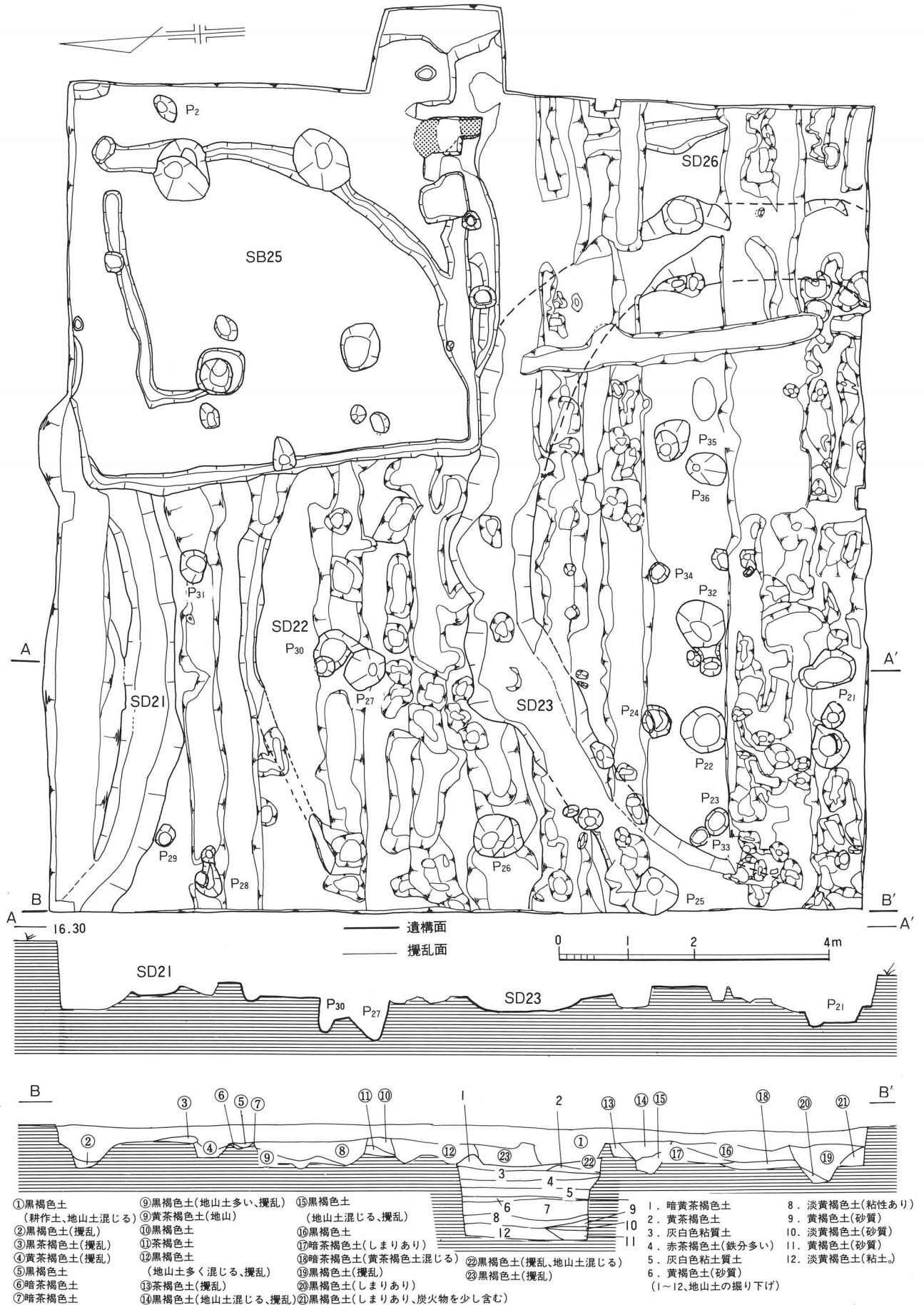
P₂₇・SD26 (第12図の208・209)

208は壺底部で、209は高杯脚部Bとともに外面をヘラミガキする。

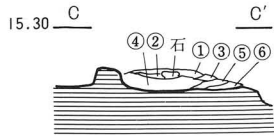
SB25 (第12図の210～238)

210は長頸の壺Aにあたり、211・212は赤彩した蓋Bに分類される。213は擬凹線を施した甕Aである。214は器台Aで、口縁端部を下方にひろげ篋描き沈線を引く。215は高杯脚部Aである。

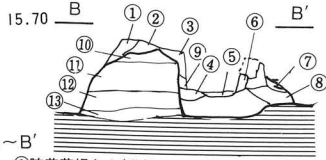
216～232は須恵器で、233～238は土師器である。住居跡床面から10～30cm上に浮いて出土した土器は、216～222～



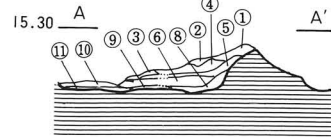
第10図 SD21・22・23・SB25遺構図



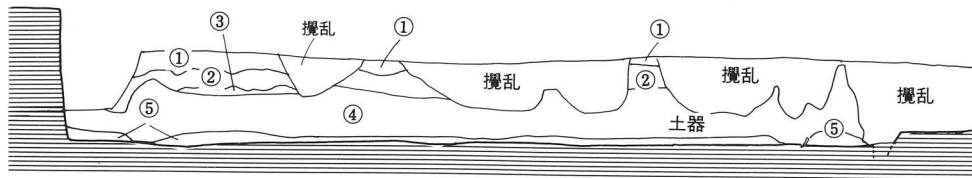
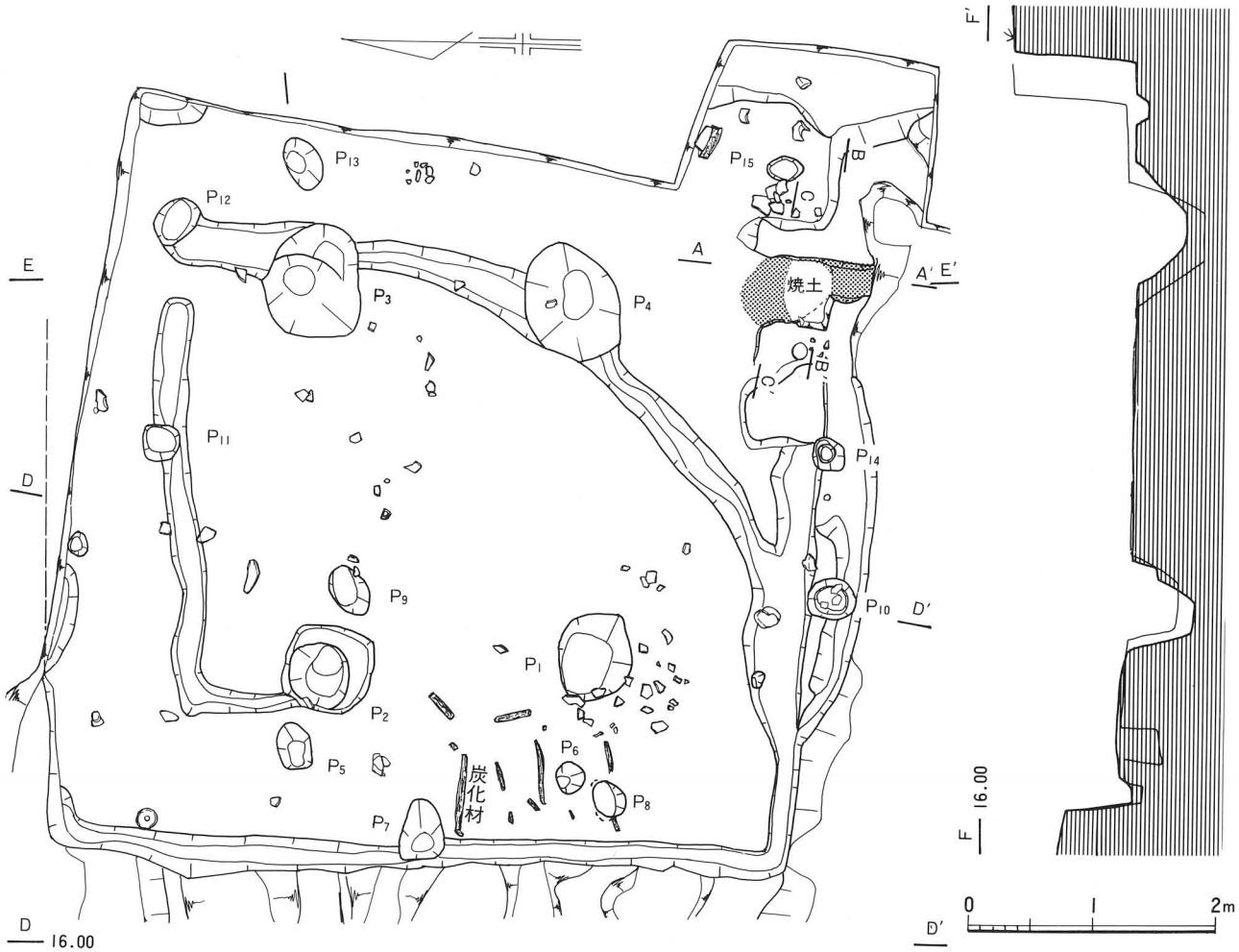
- ①黄褐色土(地山層に焼土を少し混じえる)
- ②暗赤褐色土(焼土面)
- ③暗赤褐色土(焼土塊と木炭粒を混じえる)
- ④暗褐色土(黄褐色土、焼土粒、褐色土を混じえる)
- ⑤暗茶褐色土(褐色土に多くの木炭粒を含む)
- ⑥明黄色土(張り床面、わずかに木炭粒を混じえる)



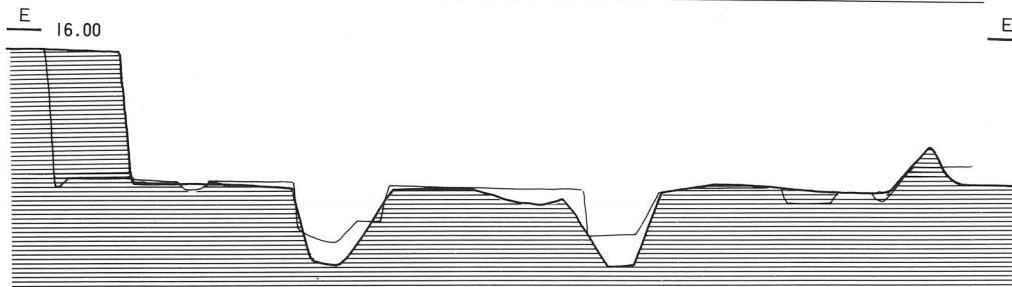
- ①暗黄茶褐色土(黄褐色土と茶褐色土)
- ②黄茶褐色土(黄褐色土と茶褐色土)
- ③黄茶褐色土(上半が赤く焼ける)
- ④茶褐色土(少し黄褐色土を含む)
- ⑤茶褐色土(少し黄褐色土と焼土を少し含む)
- ⑥明黄褐色土(地山土)
- ⑦褐色土(少し木炭粒を含む)
- ⑧茶褐色土(少し黄褐色土を含む)
- ⑨黄茶褐色土(少し茶褐色土を含む)
- ⑩明黄色粘質土(地山土)
- ⑪明黄灰色粘質土(地山土)
- ⑫暗色砂質土(地山土)
- ⑬黄灰色粘質土(地山土)



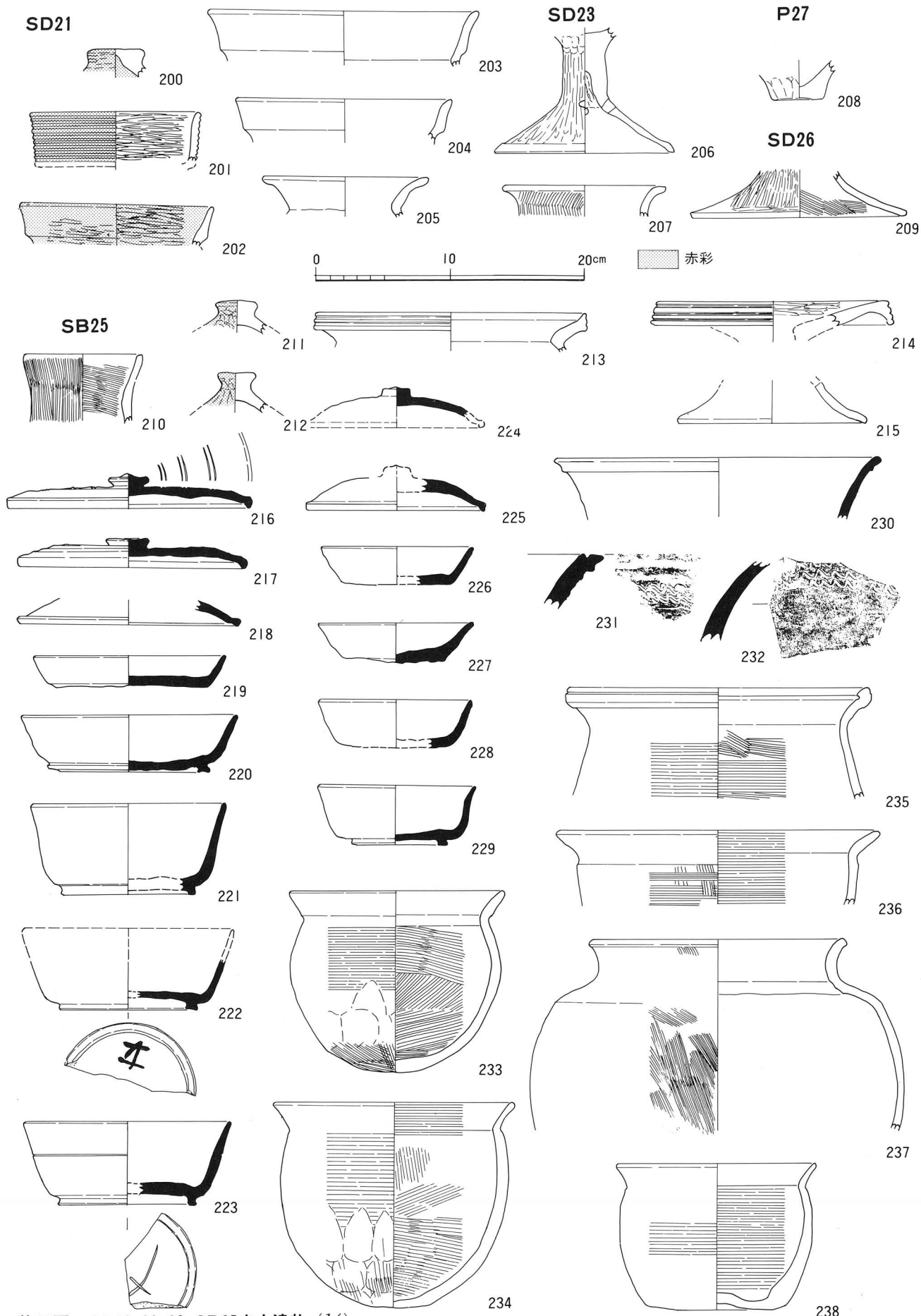
- ①暗黄褐色土(地山土に少し焼土が入る)
- ②黒色土(炭化物、焼土粒を少し混じえる)
- ③茶褐色土(炭化物、焼土粒を少し混じえる)
- ④黄褐色土(地山層に焼土を混じえる、カマドの天井部)
- ⑤暗赤褐色土(焼土面、カマドの天井焼土面を含む)
- ⑥暗赤褐色土(焼土塊2~5cm大を多くと、木炭粒を少し含む)
- ⑦暗褐色土(黄褐色土・褐色土・焼土粒を混じえる)
- ⑧暗黄褐色土(黄褐色土・褐色土を混じえ硬くしめる)
- ⑨赤褐色土(カマドの火床で赤く硬くしめる)
- ⑩明黄色土(張り床面、わずかに炭化物混じる)
- ⑪暗茶褐色土(褐色土に多くの木炭粒を含む)



- ①黒褐色土
- ②暗茶褐色土
- ③茶褐色土
- ④茶褐色土
- ⑤明茶褐色土



第11図 SB25遺構図及び土層図



第12図 SD21・22・23、SB25出土遺物 (1/4)

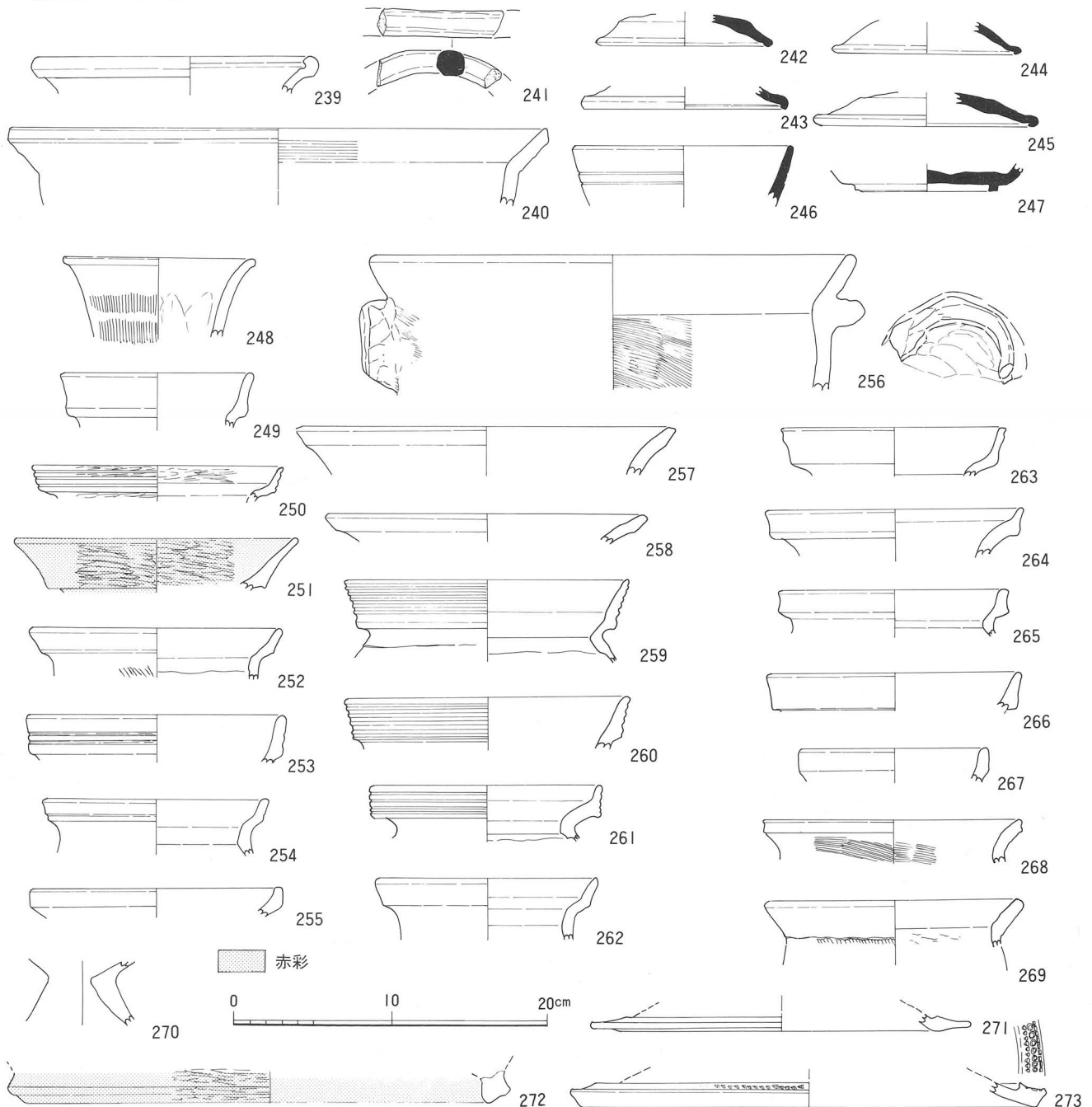
墨書土器で二字が書かれているようであるが、字義は不明である。223はへら記号。230は壺で、231・232は甕の口縁部であり波状文を描く。

233・234・238は小形甕で、体部上半をロクロナデによるカキメ、下半をへらケズリする。235は甕で口縁端部を内面に屈曲させる。6は鍋で体部上半をロクロナデによるカキメ調整をする。403ははハケメ調整の甕である。

調査区内の遺物 (第13図の239~273)

239~247は奈良・平安時代の土器で、239は235と同じ形態で9世紀末から10世紀にかけての甕である。240は鍋である。241は断面円形をした須恵質の製品で、242~247は9世紀代の杯蓋である。248~273は弥生時代末から古墳時代初期の土器で、包含層や攪乱層から出土した。

調査区出土遺物



第13図 調査区内出土遺物 (1/4)

229、230～232である。

216～218・224・225は杯蓋で、216・217の外表面はヘラケズリをし、他はヘラキリする。216には二本組の線刻をする。219は皿、226～228は無台杯で外底面をヘラキリする。220～223・229は有台杯で外底面にヘラキリ痕がのこる。222は248は長頸の壺で、249～251は壺Gであり器面をヘラミカキする。252・254・262・263・265は甕Dに分類される。255・264・267は甕Eである。有段口縁に擬凹線を施した259・260は、甕Cに、261は甕Bにあなる。「く」の字口縁の268・269は甕Lで、口縁部が肥厚する257・258は、甕Jである。この他に調査区内から縄文時代晩期の土器や、磨製石斧・砥石などが出土している。

IV. ま と め

1. 遺構

中山中遺跡の調査は、ごく一部分を発掘しただけであるが、検出された遺構は、弥生時代末から古墳時代初期の竪穴式住居跡3、溝2、穴5、柱穴状ピットなどがあり、未掘を含めると遺構は更に増加しそうである。同時期の集落は、谷一つ隔て隣接した丘陵上に立地する中山南遺跡（県指定史跡）がよく知られている。この遺跡は、昭和38年から昭和43年まで6次にわたって発掘調査し、弥生時代末から古墳時代初期にかけての竪穴式住居跡9、溝2・穴など多数が検出されている（表紙の左図）。竪穴式住居跡は中央の第1丘陵と南方の第2丘陵から発見されており、丘陵上を単位とする遺構のまとまりがみられる。中山中遺跡でもかなり遺構のまとまりがあり、相互に関連性をもつ丘陵上を単位とする集落のまとまりと理解される。詳細は、遺構ごとの時期の検討が必要となる。周辺には、三谷遺跡や中山北遺跡など弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺跡が多く、いくつかの農業共同体が存在している。

中山中遺跡の調査では、形状・規模から古墳の周溝と推定できる溝を5箇所確認している。当遺跡からは、山内賢一氏により、5世紀後半から6世紀初めの須恵器（TK216、TK23）〔西井他1988〕や、滑石製の紡錘車が採集されている。このことから5世紀後半から6世紀代に築かれた群集墳であろう。円墳の復元規模は直径8.5～13.0mである（表紙の左図）。中山南遺跡でも丘陵中央に直径約16m、幅1m、深さ50cmの規模の周溝が検出されている。両遺跡は平野部に接する丘陵上に存在し、5世紀後半から6世紀代には墓域として利用される。

2. 出土遺物

出土土器の主体は、中山南遺跡2号住居跡の出土土器と同時期にあたり、最近の成果によると月影Ⅱ式〔久々1986〕に該当する。高杯A・鉢Fが古く月影Ⅱ式・法仏Ⅱ式に含まれる。

SB25床面出土の土器は、須恵器の形態から8世紀後半にふくまれよう。

参考文献

木倉豊信 1959「郷土文化の黎明」「小杉町史」 小杉町史

久々忠義 1986「富山県における『月影式』土器について」「シンポジウム『月影式』について」

石川考古学研究会

富山県教育委員会 1966「新産業都市計画区域内中山南遺跡分布状況緊急調査概要」

富山県教育委員会 1971「小杉町中山南遺跡調査報告書」

西井龍義・林寺巖州・大野究 1988「氷見市園カンデ遺跡」大境12号 富山考古学会

図版1 (平成元年度の調査)



PL1. SB01 北東から



PL2. SB01 東から



PL3. SD11近くの作業状況



PL4. SD11 西から



PL5. 発掘区近景 北から



PL6. SD20 (B地点試掘)

図版 2 (平成 2 年度の調査)



PL7. 発掘区近景 南から



PL8. SD21 東から



PL9. SB25の土器出土状況



PL10. SD23 西から



PL11. SB25 西から



PL12. 作業状況 南から

小杉町中山中遺跡発掘調査概要

平成2年3月30日 発行

編集 小杉町教育委員会
発行 富山県射水郡小杉町戸破1551
〒939-03 電話0766(56)1511

印刷 日興印刷株式会社
